

# 昔話のしまごか

むかしばなし

## 「五月節句と蓬」<sup>よもぎ</sup>

昔、ある男の子が、故郷から遠く離れて暮らしておりました。五月節句の時、親に会いたくなり、我が家に帰ることにしました。

ところが、村の近くまで来たとき、田畑がすっかり荒れているのを見ました。

「おかしかなあ、人の姿も見えないが」と思いつつ、我が家に行ってみると、庭は草ぼうぼう、家の壁にはツタが這っています。

「おっかん、今じゃったど」と、戸を開けたところ、見知らぬおばあさんがひとり囲炉裏に座って

いました。おばあさんは親しげに、

「おお、戻ってきたか。お前のおっかんなたちは、遊びに行っておる」と言いました。そして、カネチヨカ

(鉄瓶)を囲炉裏の火に掛け、「しばらく待つておれよ」と外へ出て行きました。

「あのばあさんは、誰だろう。おれは会ったことはないがな」と考えていると、どこからか白ネズミが走ってきて言いました。

「私はお前のおっかさんだ。お前が心配でねえ、こんな姿になって待つていたよ。あのばあさんは鬼



なんだよ。村の人はみんなあれに食われてしまった。鬼は、今、川で歯を研いでおる。お前を食うつもりだから、すぐ逃げなさい。さあ早く早く」

男の子は、すぐさま家をとびだし、どんどん走りました。しかし、まもなく、「待てー」という声が聞こえてきます。振り向くと、白髪を逆立ててすごい形相になった鬼が迫ってくるのです。男の子は必死で走り、スキの茂みにはいりこみました。鬼は男の子の姿を見失ったようで、うろろろしています。でも、それは一瞬のこと、すぐに追いつかれ

そうになりました。すると、今度は蓬の深い茂みがあったので、男の子はそこに逃げ込みました。鬼も続こうとしましたが、突然後ずさりをして、それ以上は追いかけて来ませんでした。蓬の匂いがきついので進めなかったのだそうです。

こういうことから、五月節句には蓬を使うのだと伝えられています。

(原話 三島村硫黄島

岩切常熊)